

#### 第四 1953年の「らい予防法」

同年9月26日付でレオナード・ウッド記念財団は、南アフリカとフィリピンで同財団が行っているテスト・プログラムを日本に拡充することを発表した。また同財団は、1951年12月28日にこのプログラムの日本側スタッフとして、Aisei-enのK. Mitsuda, Y. Hayashi, T. Nojima, T. Miyata、Komyo-enのR. Jingu, Y. Hayashi, T. Nojima, Nambaの名前を公式に発表した。

同年10月8日付のMemorandum for recordでは、Dr. DoullとDr. Badgerの日本訪問について、厚生省のDr. Omura, Dr. Takabe, Mr. SaitaとKnightが会談し、両名が日本で交流する研究者に、Dr. Hayashi (Zensho-en)、Dr. Mitsuda (Aisei-en)、Dr. Miyasaki (Kikuchi Keifu-en)の3名が日本の傑出したらい病学者として推薦された。また、東京大学の薬理学教授であるDr. Ishidateがプロミンの研究に関して興味をもっていると報告した。また、このことはMollohanよりTurnerに書簡で通知された、Dr. Scheele (Surgeon General)にも報告された。また、Turnerからは同年10月25日にその返信が届き、Dr. Doullは個人的に知っていてとても有望な人物であるが、Dr. Badgerは個人的には知らないと書いてあった。

このDr. DoullとDr. Badgerの両名による日本での活動については、史料に欠損があるためかどうか分からないが、何も残されていなかったが、Dr. Doullがアメリカ合衆国へ帰国後にPollockに宛てた書簡の中で、日本での研究は多くの支援を頂き感謝すると記されていた。また、Dr. Takehisa Omuraがレオナード・ウッド記念財団に宛てた、カメラを2台受領したという内容の書簡において、Dr. Omuraが書簡の差出人の所属として、Secretary, Japanese Committee for Leonard Wood Memorial Chemotherapy Projectと書いていることから、彼が日本におけるレオナード・ウッド記念財団の化学療法プログラム代表となっていることが分かった。

一方、PHWでは、Shamboraが厚生省宛てに、レオナード・ウッド記念財団のこのプログラムについて正式に報告し、今後PHWが同財団の日本での窓口となることと同財団の活動に関する費用を非課税にすることなどを申し入れていた。なお、Samsはマッカーサー元帥の解任(1951年4月11日)に怒り、PHW部長を辞任(1951年5月25日)しており、Shamboraはその後任らしいがまだ正式に確認していないことを記しておく。

#### 4. 日本の研究者を国際学会へ復帰させるための働きかけ

第二次大戦勃発後、日本人研究者は事実上、国際的な活動を中止せざるを得なくなり、戦後の占領期においても日本人の海外渡航は厳しく制限され、国際的な学会への参加も基本的に不可能な状態にあった。そのため、ハンセン病に関する国際学会であるInternational Leprosy Associationは各方面に働きかけて、日本人研究者を学会に復帰させ、学会誌への投稿を可能にするように活動した。

まず、International Journal of Leprosyの編集者であるWadeは、1948年11月4日付けのSams宛ての書簡において、「本学会としては学会誌の発行を戦前と同じようにしたいと考えている。戦前にはDr. Otaが公式のContributing Editorであり、彼は非常に協力的だった。そして、より協力的だったのは、鹿児島県のらい療養所のDr. Fumio Hayashiだったが、彼は死んだと聞いている。新しい日本の代表を得るためには、貴殿の協力が是非とも必要である(抄訳)」と述べていた。また、Japan

Leprosy Society の会長であった Hayashi は、「Japan Leprosy Society が International Leprosy Society に参加することを希望する。Japan Leprosy Society の学会誌「レプラ (Lepra)」は 1947 年 2 月より復刊した (抄訳)」と Wade 宛てに書簡を送っていた。

上記した Wade の Sams 宛ての書簡は郵便事故か紛失のため、Sams には届いてなかったようで、Wade は 1949 年 7 月 25 日に再び Sams 宛てに書簡を送っていた。そして、Sams はその返信として、「貴殿の 7 月 25 日付の書簡を受け取った。Dr. Ota と Dr. F. Hayashi は死去した。多磨全生園の Dr. Y. Hayashi と会談を持ち、彼が International Journal of Leprosy の Contributing Editor に就任する意思があることを確認した。東京大学の Dr. Kitamura も自発的に Contributing Editor を引き受けるそうだ。私は会ったことはないが、Nagashima Aisei-en の Dr. Mitsuda は日本におけるこの領域の権威であり、第 1 級の人物だと信じている。上記したすべての人物は英語の読み書きができる。Japan Leprosy Association を International Leprosy Association のメンバーとする許可を考えてほしい。SCAP としてはそれが望ましいと考えている (抄訳)」と記していた。

これに対し Wade は、1949 年 10 月 21 日に 2 通の書簡を Sams に送り、1 通目には日本らい学会と国際らい学会との提携の可能性に関する質問への回答を、2 通目には「3 ヶ月ほど前に Dr. Kitamura に Contributing Editor の打診をしたが返事がない。あなたは Dr. Hayashi を推薦するが私にとっては少し驚きである。なぜなら、彼はまったく英語が話せないからだ。Mitsuda も候補であると思うが、Hayashi に連絡をとってみたいと思う (抄訳)」と記していた。

この Wade の書簡に対して Sams は、「International Journal of Leprosy の Contributing Editor として、日本らい学会会長の Dr. Hayashi を推薦する。彼は英語を話したり聞いたりにはできないが、書いたり読んだりにはできる。Dr. Yoshie は英語に堪能である。次点候補としては、Dr. Kitamura を推薦する (抄訳)」と答えていたが、その後この事案に関する史料は存在せず、詳細は不明である。

#### 5. 日米の研究者による Leprosy bacillus の純粋培養に関する学術的研究の支援

現在では Leprosy bacillus (Mycobacterium leprae) の人工培養が成功しないことが分かっているが、1940-50 年代には日米の研究者がその人工培養に取り組んでおり、PHW は日米の研究者の仲介役として学術的支援を行っていた。

まず、1947 年 4 月 7 日には、Surgeon General Office の Doan が、日本のレプロスピラ菌の菌株を送るよう PHW に要請していた。また、イギリス人の Dr. Spira が Dr. Yoshinobu Hayashi 宛てに書簡を送り、「私のフッ素症に関する論文を送った。これは貴殿のらい病の研究に有用であると思う。日本において研究をしたいので、3 週間程度の滞在を受け入れてほしい (抄訳)」記し、これに対し Hayashi は、「あなたの日本訪問を喜んで受け入れる」と答えていた。これを受けて Spira は、マッカーサー元帥へ、「らい病の研究のために 3-4 週間の日本滞在をお認め願いたい」と書簡を送るが、その書簡は PHW へと回送され、Sams は「本セクションでは、その人物が特定の領域において傑出しており、公衆衛生上の主要な問題の解決に必須でない限り、顧問 (Consultant) や専門家 (Specialist) を要請することは行わない。らい病は日本において公衆衛生上において主要な問題ではない。公的な施設への患者の隔離や食糧の配布、プロミンのような近代的な薬剤の使用が

#### 第四 1953年の「らい予防法」

行われている。したがって、他の公衆衛生上の問題と比較して Dr. Spira がらい病の実験研究を行うことはその価値に疑問があり、それを目的とした日本への訪問の許可には、本セクションとして推奨できない（抄訳）」と答えていた。この Sams のかたくなとも思える拒否は、Spira の研究に疑問を持ったためか、Spira がイギリス人だったためか等、理由は分からない。ただし、1949年の段階で Sams が「らい病は日本において公衆衛生上において主要な問題ではない」と語っていることは興味深い。

Sams は Spira からの依頼は拒絶したが、他の研究者に対しては、日本滞在でなく、文書や培養器の送付であったためか、非常に協力的であった。Wilbar (President, Board of Health, Territory of Hawaii) 宛ての書簡では、Dr. Nakamura のらい菌培養に関する論文を学会に掲載前に手に入れて送付しており、University of California の Dr. Carpenter からの「Dr. Nakamura がらい菌の分離を行ったことに関して大きな関心を持っている。我々は、その培養基を手に入れたいと思っているので、もし可能なら善処願いたい（抄訳）」に対しては、「貴殿から依頼のあったらい菌のヒト菌株については、伝染病研究所 (Institute of Infectious Diseases) の Dr. Nakamura に照会をした。近いうちに Dr. Nakamura から受け取ることができるであろう（抄訳）」と回答し、その後、Dr. Nakamura から提供された培養基を送っていた。

この Dr. Nakamura の研究については、らい菌培養の成功と予防・治療に関する問題点に関する毎日新聞の記事の英訳と、らい菌培養に関する朝日新聞の記事の英訳が保管されていた。

Carpenter からはさらに、「らい菌の培養基が届いた。顎下腺ムチン (submaxillary mucin) を送ってほしい」との 1949年10月13日付の書簡が届き、Sams は同年12月12日に、Dr. Nakamura の顎下腺ムチンと論文を送っていた。翌1950年1月4日には、Carpenter から「Nakamura のムチンのサンプルと論文『らい菌の培養に関する研究 (Studies on Cultivation of the Leprosy Bacillus)』を受け取った。当方では人工培養に失敗した（抄訳）」という Carpenter の書簡が送られ、Sams は「培養の失敗は残念だった。Dr. Nakamura のムチンを使えば成功するであろう。Dr. Nakamura はアメリカ合衆国の英文学術誌への論文掲載を切望している（抄訳）」と返信していた。また、Dr. Nakamura の研究については、50年4月21日付けの Memorandum for record で報告されていた。

Carpenter 以外にも、California State Polytechnic College の Dr. Hatfield が、「Dr. Keizo Nakamura がらい菌の培養に成功したかどうかについて興味をもっている」と書簡が Sams に送られ、Sams は返信として「Dr. Keizo Nakamura のらい菌培養基に関する質問への回答して、Dr. Nakamura の日新医学に掲載された論文 (1949年5月) の英訳を送る。Dr. Carpenter と連絡をとることをお勧めする（抄訳）」と記していた。

#### 6. 特に外国籍と沖縄・奄美地域のハンセン病患者の処遇について

当時のハンセン病療養所には日本国籍の患者だけでなく、外国籍の患者も収容されていた。1947年には、アメリカ在住の女性からの日本の療養所に収容されている息子に関する問い合わせがあり、Sams はこれに対し、「上記の人物は群馬県の療養所に居住していることが分かった。らい病患者は